

安政の文

三
十
三
日

安宅家の人々

吉屋信子

毎日新聞社

安宅家の人々

¥. 270

昭和 27 年 3 月 15 日 印刷

昭和 27 年 3 月 20 日 発行

著 者 吉 屋 信 子

発行着 谷 水 真 澄

印刷所 中 央 製 本 印 刷

発 行 所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区有楽町一ノ一

大阪市北区堂島上二ノ三六

門司市清滝町一ノ九〇二

名古屋市市中村区堀内町四ノ一

© The Mainichi Press Printed in Japan

安^あ

宅^{たか}

家^け

の

人^{ひと}

々^{びと}

裝本・挿画

伊勢正義

(毎日新聞連載)

ちゅうちゅうたこかいな

——神奈川県高座郡大和町……小田急の沿線鶴間駅……積木の家のように可愛い小駅の傍に荒物屋薬舗電気器具店、低い屋根を連ねて（町）がひとつかみぼつんと置いてある。

その町を横に見棄てて、まるでなんの関係もないように、広い道路が一筋まるで水の涸れた河底のように通っている。

近くの厚木飛行場へゆききの、米軍のトラックやジープが巻きあげる砂埃で、その両脇に密生する松、杉、松その他夏になるともりもり茂り出すさまざまな灌木の葉に灰をかぶらせたように見える。道幅が広いから、かっと照りつけるとたまらない。そのあたり一軒も家はなく、ただ森林地帯。東京の傍にこんな森の野原があったかと、初めてそのあたりを見る人はちょっと驚く。

だが安宅譲二は驚かない——すでに二、三度来たことのある道だった。もっともそれは戦前で、彼は東京から自家用車を走らせてだった。

いまの彼には車はない。電車でこの小さい駅に降り、埃と真屋の草いきれの中を、白リネンのぱりとした夏服ながら、昨夜軽井沢からの汽車とそして此処までの電車で背に横皺もより、ズボン

に黒っぽいよごれもついている。白と茶のコンビネーションのあざやかな靴も埃まぶれである。

たいていの男の持つて歩いている折^{ゾウライ}靴もぶらさげていない、手ぶらのまま……銀座あたりをぶらりと歩いている伊達^{イダ}男が、どうしたのか、こんな野道をさまよっているとも思える。

——彼はもう駅からおよそ十分ばかり歩きつづけている。かんかん照る下でさすがにこの伊達^{イダ}男参^まったと見えて、あみだかぶりのバナマ帽をときどき取って、ポケットから、これも車中ですでによごれて皺^{しわ}くちやになった白麻^{シロカサ}の半巾をつかみ出して額をぬぐう。半巾は別にも一つ胸ポケットに頭文字^{しりふ}の刺繡^{しゅう}の白半巾を三角にのぞかせている。

彼は炎天の下を歩かねばならぬ自分がいまいましてならぬように、半巾で汗をぬぐいながら、
(たまらんなア、まったくこんな処へ住むのは——)

と独り言で自嘲の苦笑を浮かべると浅黒い筋骨質の頬や口許がほろ苦くゆがむ。ややつり上がった細い眼が小さく、ひとを小ばかにするような感じである。

——その彼にはまるで死の行進に似て苦しかったらしい歩行がいつときぴたと止まった。

道に沿う杉の茂みの中に、朱の褪^あせた煉瓦を積んだ低い門、そこに古びたやや大きめの表札に墨色の薄れた字だが『安宅養豚場』と読める。その片側の小さい表札は——安宅宗一。

譲二はやっと目的地に達したのである。

門内の小道の左右に高くのびた杉の木立が陽^ひをさえぎる。根元に羊齒^{しだ}が密生し、ひやりとして杉林がさながら冷房装置だった。

「まるで軽井沢ですね、あの道から入るとこの涼しさは！」

讓二は、この養豚場主の異母兄宗一の妻の国子に会って挨拶がすむなり、仰山な身振りで少し氣取った声をあげた。

「そうでしょうか、その代り冬のきびしさはたまったものではございませんよ、電柱がこんなに……」

と指で長さを示す国子の方をろくに見もせず、讓二はそそくさと上着を脱いで椅子を立て、

「ともかく顔を洗わせて下さい……なにしろ夜行で今朝上野へ、そこから此処までよこれほうだいですよ」

と扉を開けてから、振り返り、

「国子さん、洗面所はあっちでしたね」

「ええ、その突き当りでございます。いま新しいタオルを差し上げます」

いかにもその人柄らしい切り口上で、国子はその後を追う——去年あたりの手製のワンピースの藍の縞が洗ってすこし薄ぼけた裾から素足にスリッパをひっかけている姿、髪は何の技巧もなく前をちよつと分けただけ後にひつつめて巻いている、瘦せて陽に焼けた顔は頬骨が出てやつれた感じだ、濃い眉にせまって銀ぶちの古風な型の近眼鏡——なんの化粧もよそおいもないが、その代り、実に堅気な律儀なそして知識婦人という感じの国子だった。ひと昔前婦人参政權獲得運動者によくこういう色気ぬきの型を見かけたが……しかしこの人には、そうした女史型の雄弁とか才気とかは見

えず、ただ切り口上のしんのかたい融通性はみじんもなさそうである。

国子と良人宗一の住居は、この六万三千坪の安宅家の地所の中の一部の森を切り拓いて、前に芝生を置いた青ペンキ塗りの明治時代の感覚の小じんまりと真四角な二階建の洋館である。

その建物は宗一、譲二の兄弟の亡父安宅宗右衛門が小石川原町の邸に英人建築技師の設計で建て、あの大正の震災にもびくともしなかったのを、宗一夫婦がこの養豚場開始に際して東京から移して彼等の家に当てられたのである。

独鈷型の古風な欄干に蔓ばらのからんだボーチを入ると扉、すぐ正面に壁煖炉が見えて、これも時代のついた籐椅子が幾つも、そこが応接間を兼ねてのサンルーム。

いまそこに譲二は入った。

「ああ、これでやっと人心地がつかしました。やれやれだ。なにしろてくてく歩いたんですからね」彼は洗面所から戻ると、椅子の背の上着からシガレットケースを取り出した。

その彼の前に、国子はコップの薄曇るほど冷えた麦湯を差し出す。

「すいぶんお久しぶりでした、こんな遠くまでよくお出かけ下さいました」

国子は卓子を間に向かい合う。

ふだんは、ほとんど音信も不通なような義弟の突然の訪問が、不思議でならない彼女だった。

麦湯のコップを取り上げた譲二はひと口飲んで、そのコップの中の薄茶色の液体を意味ありげに眺めて、口許をゆがめる癖のうす笑いを浮べ、

「ちょっとこれは、ビールを思い出させますね」

と、その泡立つ冷たい奴をぐっといま味わいたくなつたと見えて、実感をこめていい、その小さい顔が一瞬もの欲しげに卑しくさえた。なつた。

「あいにく宅にはアルコール類は一切ございません」

せんがせぬという風な重々しい切り口上の国子だつた。

「いや……なにも催促したわけじゃありませんよ」

慌てて譲二は、麦湯をみな飲んでしまった。

なんだか白けてしまうのを、まぎらすためにもシガレットケースを開けると、車中でむやみと吸つたせいで、僅かにたつた一本！　うかつだつた、途中で仕入れてくればよかったと思つたが間に合わない、これもまたどうせ……（宅にはニコチン類は一切ございませんぬ）……とやられるにきまつている——譲二は心で苦笑して、その貴重な一本を指に——ライターを上着のポケットからと、椅子の背へ振り向く時、

「マッチならございます」

と国子がいつた。

なるほど——その卓上に青銅の小さい豚が一匹餌箱に前脚をかけている。その餌箱が灰落しになつてゐるのだ。その中にまだ吸殻はなくマッチがぼつんと入れてあつた。

「ああこれ、ここの開場祝いの記念の——僕も二つも貰つたのに、原町で焼いてしまつたな」

譲二は次男ながら亡父の邸を継いで住んでいた原町の邸は、戦災に罹って二つの灰皿に盛り切れぬ灰の山となった。

「雅子まさこさんもお変りございませんか——」

国子は、義弟の妻の名をいった。戦争の時期がつづいたせいもあってあまり会う機会のなかった義妹だった。彼等夫妻の原町が焼けてから、赤倉温泉の安宅家の別荘——これも譲二のものになっていた——それへ移っていたのだ。春そこを売り払って、残る一つの別荘の軽井沢へ譲二夫妻は移って行つたのだ。

「やア、あれからもよろしくと——国子さん、いよいよ、軽井沢の家も手放します、なにしろ夏以外年中住めるところじゃなし……秋までにはいずれ……」

「やはり原町へ小さくとも御普請ごふしんなすってお戻りになるのが、亡くなったお父様への何よりの孝行でございますのね」

孝行！ 国子の口から古ぼけた戦争前の言葉が出たような感じだった。

国に忠、親には孝……そんなことは昔ははやっていたなと、譲二もやっと思ひ出す。

「ハハ、戦争に敗けたおかげで、忠も孝も、すっかり廃物になりましたね」

譲二は煙草の煙を笑い声の中に渦巻かせた。

「私はこんな世を離れた別世界の森の中に、いちんち豚を相手に暮していますから、戦争前まへも後あともおんなじでございます」

国子は素足にスリッパの足をきちんと椅子の下に揃えていう。

「いいですなあ、実に羨ましい、僕などは金を相手に一日苦労するんだからやり切れない……」
そういう義弟をちらと国子は眼鏡の奥から見る……軽井沢とやらでは彼は毎日ゴルフをしたりして暮らしているとか伝わっているのに……。

「国子さん、実はそれで、今の僕の事業も自分が出て来てやるつもりです。——どうも人まかせではね、つぎ込む一方で……損失だけ負わされる……それで軽井沢も引きあげます、すると差し当って寝る屋根の下が必要となるんですが——それがいま原町に小さい家なんて——どうもね、おいそれとは……坪二、三万ではいまごろバラックに毛が生えたようなものでしょう——そんなものを建てたんじゃあ、それこそ亡くなったあの普請道楽だった親爺に不孝でしようね……だから僕は、いっそあの地所は、事業のための資金に換えた方がさっぱりするんです」

「まあ、あすこまで……原町を……お手放しに……」

国子の顔は、ひどく感傷的だった。

小石川原町のありし日の安宅邸は、国子にも幼少の頃からの思い出があった。彼女の父は安宅家の執事で、その邸内の一隅に家を貰って住んでいたのだ。

「だが、国子さん、僕は過去に執着しませんよ。何しろ戦後は一切出なおして、万事御破算で新しく出立ですよ……」

——談二の煙草はもう尽きた。豚の餌箱の灰皿へぽんと——過去の吸殻を棄てる。

——国子は考える。この義弟の戦後々々というその戦後もうこうして幾年にもなるのに——いたい何をしていたのか——赤倉の温泉付き別荘、先代の愛していたそこを売る頃は、輸出向き竹細工の工場を経営、これも人任せで、振わず、ついに潰れて、その穴埋めだと聞いた……こんどはまた何をするのか——まったく亡父安宅宗右衛門の残した財を売り食いの生活で——のんしやりと——働くことを知らぬ男の白い両手……。

「いいなあ——この家は、うまいことしましたね、ここへ移して焼けずに……」

と譲二はそのサンルームを見回す。正面の壁暖炉の棚にあるウェストミンスターの鐘の時計も原町の安宅邸の応接間にあったものだ……暖炉の上の油絵——緑の木陰の木柵の中に母豚子豚の群らがる風景は、曾ての帝展出品画M画伯の筆である。これは亡父宗右衛門が不幸な長男の養豚場主となる門出を祝って贈ったもの……。

「おかげさまで、御本邸の記念の一部になるものとなりました」

国子は例の切り口上で肅然とした。

譲二はさっきから国子に切り出そうとする彼にとっての大事な問題を持ってこそ——今日此処へわざわざたずねて来たのだ。

だが国子のかたい打ちとけぬ性質そのものの態度に接すると——さすがの彼も手も足も出ぬ形だった。

こんな時、せめてもう一本煙草があると、なんとか、その煙にぼかしてうまく、口がほどけるの

だが——あいにくそれもない。

飲みつくした麦湯のコップを指先で撫でまわしながら、彼は——(あによめ)「嫂だってなんだ、もとをただせば元うちの執事しじの爺さんの娘じゃないか」と考えると勇気が出た。

「国子さん、お頼みがあるんですがね、ひとつ僕たちの住居の点で御助力願いたいんだが——此処にそら、最初養豚技術指導の為に、なんとかいう農学士を住まわせて置いた役宅がいま空いてるんでしたね」

「はあ」

国子はこれだけ——身体をかたくしている。

豚飼養、管理、蕃殖の指導者として畜産専門の農学士の家族と獣医の家族、その役宅を此処の開場と共に建築していた。もう今ではその指導の必要もなく、農学士は去った。獣医の方は、まだ居るが……。

「その家を僕たちに貸して下さらないかな？　この住宅難にあけて置くのも、もったいない話じゃありませんか」

「……………」

国子からの反応は——表示されない。

「いかがですか、僕も目下その点で窮きゅうしてますが、事業資金のことを考えると、まったく家うちどころでないんで……」

「こんな寂しい野原の森の中へとうていお住みにはなれません、貴方がたのような貴族的なそして都会趣味の方は」

「そ、そんなことはないさ。国子さん、僕たちは赤倉の山の中にもいたんですよ」

「でも、それは温泉付きの風雅な別荘でしたが、こちらの役宅はほんの昔の安普請あふしんの、せいぜい四間ばかりの家です、そして豚の鳴声ばかりに囲まれて——」

「いや、それで結構。東京の僕の子どもの事務所は、電車やバスの音が絶えず、そのたびにグラグラゆれるんですからね。それよりは——豚の声の方が長閑のどかで神経が静まりますよ」
と笑う。

「その東京までお出になるのに一時間以上かかりますよ」

「かまいませんな、鎌倉逗子方面から毎日東京へ通勤する人はわんさと居りますしね」

「雅子さんがさぞおいやでしょう、養豚場の森の中などへ——たいへんいいお育ちで、そしてあんな近代的なお綺麗な方ですからね」

「ところが、あれでなかなか田園詩人ですよ、赤倉でも東京へなぞ少しも出てゆきたがらなかったですよ」

ああいえばこういう、こういえばああいう——国子はいに持てあました。

「主人に相談して、いすれ御返事いたします」

毅然きぜんとした切り口上が、国子の最後の答えだった。

主人に相談！ 譲二は皮肉な小意地の悪い微笑を浮かべた。小ざかしい眼が人を小ばかにしたそれである。

異母兄の宗一は、幼少から普通の小学教育を受けられなかった精神薄弱児だった。そうした特殊児童の教育機関の財団法人小桜学園に預けられて、年齢長するまで——学園長の故岩井篤輔氏が全力をあげての教育指導訓練の結果——現在のように、ともあれ妻帯もし、名義だけでも養豚場主となつて今日に及んでいる。

従つてこの養豚事業も、なにもかも、全部妻の国子が一切を支配しているが、仮にも良人たる者を、彼女はけつしてないがしろには扱わなかった。

(主人に相談します) 国子はいつもこうして良人に權威を持たせた。自分の良人を侮る事おたどは、とりもなおさず妻の自分を自分で侮ることだと思つたからである。

「兄さんにも挨拶したかったが——ともかくいまの用件を貴女に話して置きたかつたんで——兄さんいますか？」

「只今書齋で勉強中ですから、失礼して居りました」

その——書齋で勉強中——がおかしい感じで譲二は思わすクスリとするとところだった。

それについても、この安宅養豚場主、安宅宗一の目下勉強中の書齋を、読者に委しく説明せねばなるまい。

それは二階の寢室に隣するおよそ畳なら十四五枚敷ける洋室である。床の中央に色褪せたがこれも東京の原町の元安宅邸にあった支那絨毯が敷いてある。そしてやはり中央に玉突き台ぐらいの卓子がありその上一面が安宅養豚場全景の鳥瞰模型である。

森あり川あり田あり畑あり、そこに豚舎が幾棟も、親指の先ほどの親豚、小指の先ほどの子豚が可愛く模型で出来ている……餌を煮る釜場——餌料室等もそのままに——一切の縮図模型、場主の住宅も庭も、使用人住宅の長屋も、譲二の借りたい農学士の元住居も何もかも……。

宗一はこの模型を愛して、毎日一時間も二時間もこれの子供のごとく喜び眺めて倦きることを知らぬ。書斎の壁には大きなどっしりした書棚——さながら大学教授の研究室にでもすえられているような感じのが置かれてある。だがその中の内容は実に微笑ましく愛らしい書籍がずらりと肩をなべている。

世界童話全集。日本お伽噺全集。少年科学。昆虫の話。魚類絵図。動物いろいろ。アミーチスの少年物語「クオレ」の絵入り訳書。アリババの話。こども知識絵本。汽車と飛行機。少年美術史、世界の偉い人。太陽と月の話。海の底の不思議。少年歴史物語。こどもの聖書。絵入童謡集。英語単語絵入本……ETC。

——その書棚に向かって東と南に、古風な鍍戸付きの長細い窓が幾つか切つてある。その窓と窓の間の小壁に一つずつ額がかけられてある。

まず端から説明すると——セビヤ色の版画の額、キリストが九十九匹の羊より一匹の迷える羊を